

「なぜ、はたらくのですか？」と聞かれれば「しあわせになるために、はたります。」と答える。そのとき私は、狭義の「賃金を得るジョブ」だけでなく、「人にものを考えさせるジョブ」(端業)を意識している。それはぶれジョブという活動をつらぬく考えて、一五年前に、特別支援学校で出会ったTさんが私に対して示した仕事のかたちである。

彼女は生まれてから、重心病棟のナースセンター隣のベッドから病院外へ出たことがなく、教師とベッドサイドで学習する子どもだった。体は扁平になり硬縮がすみ、自力で動かせる所はなかったが、呼吸するとき全身を震わせて思いを伝える手段をもっていた。気管切開していたので声帯を使った音を介するコミュニケーションはなかったが、私は彼女のそばにいくのが毎日楽しくてしかたなかった。私と彼女はいつもお互いのやりとりを楽しんでいたからだ。彼女は、私の気配を感じると全身でうれしさを表現し、私を待っていたとうまく伝えた。場の空気を震わせるような体の芯に届く表現はいつもいつでも私を幸せにした。彼女は使える機能をその能力いっぱい使って他者に力をかたむけた。見返りなどない命がけの行為である。「幸せに生きるとはどういうことだろうか？」彼女は「私に考えさせるジョブ」をしていた。双子で生まれ一方の彼女だけが与えられた命のかたちを、彼女はあるがまま引き受けて懸命に生きていた。それは自然に暮らす生き物と同じで恨んだり悲しんだりではなく、状況をそのまま引き受け、協力したり闘ったりして力を尽くす姿だ。私が担任して二年目に彼女は亡くなったのだが、彼女の存在がぶれジョブをつくり、今を生きている。